

震災復興と防潮堤

立命館大学環太平洋文明研究センター長 安田 喜憲

海と共に暮らす生活を取り戻したい

「どうせ住めないのに、なぜこんな立派な防潮堤を造るのですか。それよりも早く仮設住宅を出て、ちゃんとした家に住みたい」

こうした声が3.11東日本大震災からもう4年目を迎えようという被災者から出始めていた。

復興に際して、まず行政が真っ先に対応したのは、巨大な津波から住民の生命をどう守るかだった。

もちろん住民の生命財産を守るのは行政の責任だが、その守り方の順番が逆転していたのではないか。まず住民の生命を守るためには、住民が美しい故郷で豊かな暮らしができることを最優先すべきだった。暮らしの再建を最優先の課題にすべきだった。あと30年後いや50年後に来るか来ないかもわからない巨大津波から生命を守ることを最優先したのは、間違いだったのではないか。

それは科学者にも責任がある。政府の中央防災会議の意見に代表されるように、災害の危険性を説くあまり、肝心の被災者の生活再建をどうするか議論がどこかへ飛んでしまった。生きとし生けるものの生命の在り方よりも、物理現象を追い求める科学の世界を優先する姿勢が影を落としている。

仙台平野には立派なコンクリートの防潮堤が完成しつつある（写真1）。しかし、その背後の津波に襲われた名取市閑上^{ゆりあげ}の街並みは、津波に襲われた当時のまま、いまだ放置されている。もちろんガレキは撤去されたが、コン

クリートの土台のまま、町の再建によやくめどが立った状態である。

行政側は言う、「コンクリートの防潮堤が完成しないと土盛りの高さが決められないので、まちづくりを始めることができない」と。これは本末転倒ではないか。まず住民の暮らしを再建することが最優先であり、防潮堤の建設はその後でよかった。

宮城県の村井嘉浩知事は、東日本大震災の直後の2011年6月に、県議会で相沢光哉議員が質問された時、「巨大なコンクリートの防潮堤を造ってくれと政府に陳情に行った」と答弁されたそうである（相沢議員談）。その村井知事の決断は、もちろん東北の人々の生命を津波から守りたいという必死の善意から出たことであろう。

しかし残念ながらその決断は正しくなかったのではないか。その前にやるべきことがあったのではないか。それはまず被災した住民の暮らしをどう立て直し、海の資源を東北の未来のためにどのように生かし、東北の沿岸漁村の歴史と伝統文化をどう守るかを、考慮されるべきではなかったのか。堤防の建設よりも、住民の暮らしを立て直すことを最優先されるべきであったのではあるまいか。

1万年以上にわたって海と共に暮らしてきた東北人の歴史と伝統文化、縄文時代以来の日本人独自の自然との共生の在り方を見れば、日本人をそ



写真1 仙台平野の海岸に完成した立派なコンクリートの防潮堤。建設直後は白くてきれいだが、数年もたつと汚く汚れてくる（撮影安田喜憲）

の生きる力の源である海と遮断しては、生きる力が湧いてこないのではあるまいか。

確かに震災直後に人々は津波の恐怖におびえ、一日も早く巨大な津波から自分たちを守ってくれる巨大な防潮堤の建設を願った。だがそれは恐怖におびえた一時のことで、時間が経つとともに人々は平常心に戻り、やはり美しい海との共生を望むようになっていく。

人間は巨大なコンクリートの防潮堤に囲まれては暮らせない（写真2）。人間の命は美しい自然、生きとし生けるものの命が輝く自然に囲まれてこそ輝くのである。

たとえ巨大なコンクリートの防潮堤によって50年に1回訪れる津波の被害から逃れることができたとしても、大地の生命力が萎え、海の命の輝きと隔絶され、美しい風土が失われ、人と人のコミュニティーが失われた中では、人は暮らせないし、生きていけないのである。

住民が望むのは、海と共に生き続ける日々の暮らしの快適性である。美しい海を眺め、潮騒の音を聞き、海のおいをかぎ、海の豊かな魚介類を採って共に助け合いながら暮らす。それが海辺で生きるということなのである。



写真2 白くきれいだった巨大なコンクリートの防潮堤は灰色に変色して汚くなり、背後の家々は3.11の津波でほとんど流されてしまった（撮影安田喜憲）

森・里・海の命の水の連環を断ち切る防潮堤

巨大防潮堤の建設は、「津波の恐怖におびえる地元住民の生命と財産を守るために必要不可欠だし、公共事業によって経済の再生を図る」という大義名分が後押しした。喜んだのは大手ゼネコンの人々である。これで長い不況を脱出できるかもしれない。だがコンクリートをはじめ資材が足りない。入札に応募する業者は少なく、必ずしも儲かる仕事ではないことが見え始めてきた。

ものすごい圧力の津波が襲ってくれば、全長 160km もある巨大な防潮堤が、今度は崩れ、二次災害さえ引き起こしかねない。

とりわけ宮城県北部のリアス式海岸に高さ 10m 以上の防潮堤を造ろうと思ったら、堤防の高さと底辺の幅は 1 対 5 の関係になっており、底辺の片幅は 50m 以上にもなる。台形の堤防を造るから、底辺の幅は合わせて 100m 以上にも達する。ところがリアス式海岸の砂浜の幅は 50m もないから、おのずから海岸をコンクリートで埋め尽くし、海底にまで防潮堤を延長しなければならなくなる。

例えば、海水浴で有名な気仙沼市の大谷海岸には、高さ 9.8m の防潮堤を

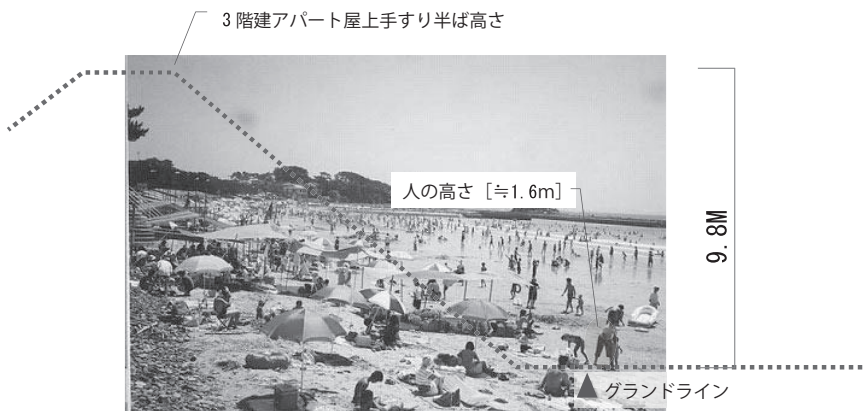


図 1 宮城県御伊勢浜海岸に造られる高さ 9.8m の防潮堤で、美しい海水浴場は全て堤防の下になる（日置道隆氏提供）

計画している。その場合、底辺の幅は100m以上にも達する。海水浴でにぎわうビーチは、完全に堤防の下になる（横山 2013）。御伊勢浜海岸は震災前は海水浴客でにぎわう美しい海岸だった。ところが震災で地盤が沈降して砂浜が減少した上に、高さ9.8mの防潮堤が建設されれば、海岸は完全にコンクリートの下になる（図1）。

田中克氏によれば、この海と陸の境界の波打ち際が最も生物多様性の高い所である（田中 2008）。ベンケイガニのように山の谷間で暮らす生き物たちが海で産卵する場合もある。その生き物が最も多く生息する海岸を、コンクリートで埋め尽くし、山と海の連環を断ち切ることは、どう見ても正しい行為とは思えない。鳴き砂浜をはじめ三陸のリアス式海岸はこの世のものとは思えない美しい海岸であるが、もしそこに防潮堤を造ることになれば、それらもコンクリートの防潮堤によって覆われてしまうことになる。

しかも、こうした砂浜海岸を、人工的に造ろうとしてもなかなかうまくいかない。砂がなかなか定着しないのである。生きとし生けるものの命あふれるビーチは、自然からの贈り物なのである。

それとともに、地下に支持杭を何万本と打ち込むことが問題である。高さ10m以上、底辺の幅100m以上に達する巨大な重さの防潮堤を、軟弱地盤の海岸部に構築するためには、地盤の固い沖積基底礫層にまで達する支持杭としての矢板を、何万本と打ち込まなければならない。その莫大な数の矢板によって、宮城県豊かな海を支えてきた森・里・海の地下水の流れが大きく

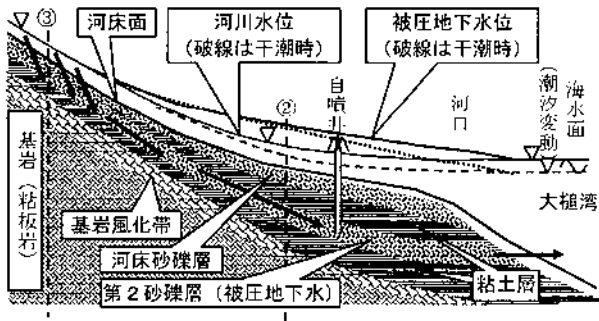


図2 森・里・海の水の循環を示す岩手県大槌湾の地下水の循環模式図。鷲見哲也「平成15年度湧水環境調査報告(水循環調査)」(森鐘一氏提供)

く変わる。

森は海の恋人運動で牡蠣^{かき}の森を植林した畠山重篤氏が実証したように、宮城県沿岸の豊かな海は、背後の森によって支えられている（畠山 2006）。森の栄養分が海に流れ、プランクトンを育て、そして豊かな漁場をつくっているのである。その森の栄養分を海に運ぶのは地表を流れる川だけではない。森鐘一氏ら（図 2）は、岩手県大槌町の調査で森の栄養分の運搬には、表面を流れる川だけでなく、地下水の流動が大きな役割を果たしていることを突き止めた（森氏談）。地下水が森の栄養分を海に運ぶのに、極めて重要な役割を果たしているのである。

森の栄養分を含んだ地下水が海底から湧き上がることで、プランクトンを育て、魚を育てているのである。それはすでに富山湾などで実証済みのことでもある。

それは戦後、巨大なダムが造られ、各河川の流水量が激減したのに、日本近海の海の豊かさが減らなかったことから分かる。川の水が減少しても、地下水が森の栄養分を海に運び込んでいるから、日本近海の海は豊穰^{ほうじょう}の海であり続けることができたのである。

森の防潮堤を構築する

しかも、塩分の影響を受ける海岸のコンクリートの劣化は早い。30 年も経てば、コンクリートの防潮堤はボロボロになっているだろう。しかし、地震などの自然災害のリズムは、はるかに長周期である。コンクリートがボロボロになる 30 年よりはるかに長い周期で次の巨大津波はやってくる。これまで巨大津波が 30 年以内に襲った例は皆無である。次の巨大津波がやってくるのは早くても 50 年以上先のことである。次の津波が襲来した時には、海岸のコンクリートはボロボロになり、役立たない単なるコンクリートの塊に成り果てている。これに対し、植林した命ある本物の防潮林は、その頃には立派なマツや照葉樹の林になっているだろう。コンクリートは本物の命ある生き物にはかなわないのである。

高さ 1～2m の防潮堤に植林し「森の防潮堤」「森の長城」を築くのである。そうした森の防潮堤構想を提出されているのが宮脇昭先生である（宮脇

2011)。「照葉樹林があったからこそ日本人は今日まで生きてこられたのだ」と指摘され、九州の新日鉄大分製鉄所から始まり、全国にタブノキ、シイやカシ類の照葉樹を植林されている（宮脇 2000、2006、2013）。なぜタブノキやカシ類の照葉樹は津波に強いのか。それは根が直根性で深く広く張るためである（図 3）。

津波に強いタブノキは、岩手県釜石市の太平洋沿岸部まで分布している。だから津波で生まれたガレキで防波堤を造り、その上に照葉樹のポット苗を植林して、「森の防潮堤」を造れというのが、宮脇先生の主張である。私はこのお考えに大賛成である。もちろん OISCA が実施している海岸にマツを植林するのも大賛成である。マツかそれとも照葉樹かを議論する前に、「コンクリートの防潮堤」か、それとも「森の防潮堤」かが問われているのである。太平洋沿岸に 300km にわたる「森の防潮堤」を築く。それはなにも照葉樹林だけでなく、マツも立派にその役割を果たしている。マツも混植した防潮林は、津波で亡くなった方々への鎮魂の森の長城ともなる。日本人の生きる力は森とそこからあふれ出る場の力から与えられる。このことをもう一度思い起こし、宮脇先生が指摘されるように、森の防潮堤を造り、そこにボランティアで植林する「森の長城作戦」を国民運動として展開すべきである。

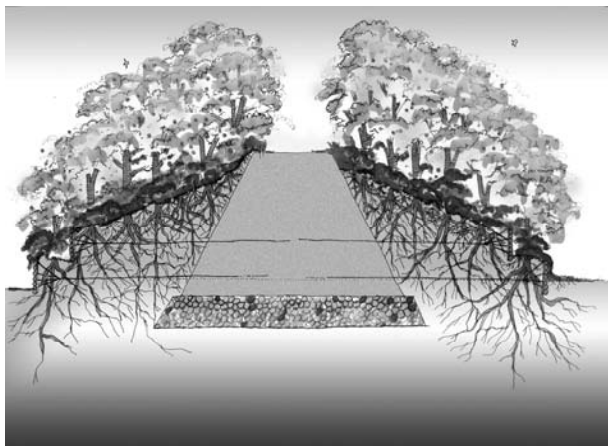


図 3 森の防潮堤の理想的な姿（日置道隆氏提供）

未来の子どもたちに何を残すのか

村井知事は鍵山秀三郎氏との対談の中で「私たちはいまこの時代にも当然責任をおわなければなりません、同時にこれから生きる子どもたちの世代に対しても大きな責任があります」（村井・鍵山 2012）と述べておられる。まさにそのとおりである。

今、私たちは未来の子どもや孫たちにコンクリートの塊を残すのか、森・里・海の水の循環に裏打ちされた豊かな海を残すのかの重大な選択を迫られているのである。

私はどうみても未来の子どもたちに残すものが、コンクリートの塊であるとは思えない。東北大学の若者に授業をしている中で、彼らに「今コンクリートの防潮堤を残すのか、それとも美しい森・里・海の水の循環に裏づけられた風土を未来の子どもたちに残すのかどちらを選択するのか」を問うと、100人の学生の99人は「美しい風土を残すべきだ。コンクリートの防潮堤ではなく、津波から逃げる教育や逃げ道を確保すべきだ」と主張した。一人だけがコンクリートの防潮堤を造るべきだと主張した。それは中国からの留学生だった。

人にはいろいろな考えがあっても、間違った考えの人がリーダーになった時、宮城の子どもたちの未来は封殺される。なぜ日本の国土の70%が森で覆われ、美しい風土が維持されているのか。それは私たちの祖先が森・里・海の水の循環系を維持することを基本に置いたライフスタイルをとってくれていたからである。中国の国土の森は今や16%にまで減少し、砂塵が舞い、激しい大気汚染が広がっても、人々は環境破壊を止めようとはしない。そこには中国人と日本人の自然観の大きな相違がある。

人が生きる力は自然から与えられる。森のささやき、潮騒の音、それらが人間の命の波動なのである。その自然のささやきから隔離された人間には、生きる力が湧いてこない。

私は村井知事と2013年2月5日に面談させていただいた時、失礼を顧みずこう言った。

「あなたは復興を促進した知事として今は高く評価され県民にも人気が高

い。だがこの防潮堤が完成し、美しい宮城の風景が台無しになり、宮城の海が死滅することが分かった時、みんなの反対を押し切って防潮堤の建設を推進した稀代の極悪人として後世評価されますよ」と。

知事は一瞬驚かれた様子だったが、「もう工事が始まっていてそれを止めると大混乱になる」の一点張りだった。そしてこうもおっしゃった。「私も本当は避難道路を造る方が重要だと思うが、住民からの要望が高いのでどうしようもない」と。確かに被災者感情を思えば津波から暮らしを守るために堤防が必要だとの議論はよく分かる。しかし、今は、未来の子どもたちにコンクリートの塊を残すのか、それとも命の森の防潮林を残すのかの選択を迫られているのである。このことを決断するのが未来を見通せる有能な政治家なのではあるまいか。

最近聞いた話だが、村井知事は「私は100年後に高く評価されるだろう」ともおっしゃっておられるそうである。しかし津波に襲われた北海道の奥尻島では、11mのコンクリートの防潮堤を建設してからわずか20年後に、沿岸の海が磯焼けでほとんど死滅してしまった。100年後どころかあと20年後に、村井知事の所業が評価される時がやって来るのではあるまいか。



写真3 巨大な防風柵まで作って植えられ、おまけに保水のための枯れ木を敷いたために、植栽したマツはすべて枯れ果ててしまった。これも国民の税金を使って行われている。遠くに防潮堤が見える（撮影安田喜憲）

若者の未来を封殺してはいけない

いかなる分野にあっても、焦点は未来を担う若者の育成にある。2014年8月12日の読売新聞仙台圏版には、防潮堤の建設を巡る最後の住民説明会(7月29日)の様子が報告されている。高さ14.7mの巨大なコンクリートの防潮堤を宮城県気仙沼市に構築する最後の住民説明会である。

会場には高校生も参加していた。「大人たちのやり取りを聞いていた男子生徒が、意を決したように立ち上がり『防潮堤の必要性が分かりません』と言った。しかし周囲の反応は冷ややかだった。『高校生が何を言っているんだ』と、露骨に厳しい声を浴びせる参加者もいた。初参加の女子生徒は『後世のために』と言うのならどうして私たちの意見を聞いてくれないのだと泣いていた」と記者は書いている。

未来を担う若者の声を聴くことなく、宮城県では今着々と巨大なコンクリートの防潮堤の建設が始まっている。若者は未来を創造しているのである。その若者の反対意見を押し切って建設される巨大な防潮堤は、きっと未来に禍根を残すことになるだろう。

この記事を読んで、「2011年の3.11の東日本大震災の時に、一つのビスケットを三つに分けて耐え忍び、暴動や略奪も一切起こらず、世界の絶賛を浴びた人々も、とうとう耐え切れなくなったな」と私は思った。仮設住宅に3年以上も暮らせば未来どころではなくなる。今の暮らしを立て直し、1日も早くまともな家に住みたい。そんな気持ちが「高校生が何を言っているんだ」という発言を生んだのだと思う。東北人の忍耐強さもとうとう限界にきたのである。心優しい東北の人々をここまで追い詰めてはいけない。

なぜ巨大な防潮堤を造る前に、こうした被災者に1日も早く家を建ててあげ、快適な暮らしを保証できなかったのか。宮城県では今着々と巨大なコンクリートの防潮堤の建設が始まっているというのにである。巨大なコンクリートの防潮堤を造る費用も結局は国民の税金から来ているのではないか。ならばなぜ、被災者に1日も早く快適な暮らしを保証できないのか。それは国と地方のリーダーの無策が招いた失態であると私は思わざるをえない。未来を担う若者の声を聴くゆとりもない状態にまで宮城県の被災者を追い詰

めてはならない。若者は未来を創造しているのである。その若者の反対意見を押し切って建設される巨大な防潮堤は、きっと未来に禍根を残すことになるだろう。

リーダーには「人と未来を見通す目」がなければならない。今、宮城県の子供たちの未来の封殺が始まっているのではあるまいか。

里山と里海を造り、その文化的伝統を守ってきた人々の叡智^{えいち}を未来に残すことは、日本人と日本文化を守り未来に伝えるために、どうしてもなさねばならないことなのである。

「今あなたが国や地方の政治と行政を任されているのは、未来の子供たちのためなのである」「リーダーに先見の明がない時、子供たちの未来は封殺される」。このことをどうか肝に銘じてもらいたい。

これからは「何を造るのか」ではなく「何を残すのか」が我々人類の重要な課題になってくるのである。

〔引用文献〕

- 田中克『森里海連環学への道』旬報社 2008年
畠山重篤『森は海の恋人』文春文庫 2006年
宮脇昭・板橋興宗『鎮守の森』新潮社 2000年
宮脇昭『木を植えよ!』新潮選書 2006年
宮脇昭『瓦礫を活かす「森の防波堤」が命を守る』学研新書 2011年
宮脇昭『森の力』講談社現代新書 2013年
村井嘉浩・鍵山秀三郎「復興への視点」致知、6月号、2012年
横山勝英「津波と共に生きる」ACADEMIA 140 1-19 2013年